

「6次産業」育つ農家

生産から小売りまで

第1次産業（農林業）、2次産業（製造業）、3次産業（小売業）の性格をあわせ持つ「6次産業」が注目されている。農家が育てた作物を農協などに売るだけでなく、加工や消費者への販売まで自らやって利益を上げる手法。収入を少しでも伸ばそうと取り組む人が広がっており、加工を手がける生産者はこの5年で4割増えた。（田幸香純）

京都市の農家が設立した農業生産法人「こと京都」（山田敏之社長）は、九条ねぎに、使いやすく刻むカットの手間を加えて成長した。12月には新工場を稼働させる。これまで業務用だけだったが、スーパーなど消費者向けにも販路を広げる予定だ。カットネギを始めたのは2000年。山田氏はその6年前にアパレルの営業マンから実家の農業を継いだ。休みなく働いても収入は年400万円程度。売り上げ増を狙って作付けを九条ねぎに絞った。さらにカットに目を付けた。東京のラーメン店へ飛び込み営業をすると、ラーメンブームにも後押しされて売り上げが急増した。昨年の売上高

加工業者4割増 収入伸び雇用も

6次産業 東京大の今村奈良臣・名誉教授が提唱した造語。農林業（1次産業）と製造業（2次産業）、小売業（3次産業）を組み合わせた新しい経営形態を指す。農業を続けながら利益を上げ、それぞれの土地の資源を有効に活用することで、地域活性化にもつながると期待されている。



ネギの汚れた部分をはぎ取る。すべてが手作業だ。京都市伏見区のこと

るだけの農家だったら、ここまで人は雇えなかった」と野島五兵衛社長は話す。農林水産省によると、08年度の農業の国内生産額は9兆8千億円。一方、流通や外食までを加えた農業・食品関連産業の国内生産額は99兆2300億円。国内には輸入農産物も流通している。単純比較はできないが、市場規模は農業生産の10倍以上ある。販売の過程で付加価値がつくことが大きな理由の一つだ。6次産業は、その付加価値を農家自らがつける試みだ。農林水産省が5年ごとに行う農林業センサスによると、加工を手がける農業者や農業集団の数は、10年は5年前の約43%増の3万4千だった。ただ、課題も多い。農家が加工、販売まですれば在庫をかかえるリスクも抱え込む。甲賀もち工房では2年前、おつりの手間を省こうと草餅の価格を数十円上げて切りのいい額にしたところ、ばたりと売れなくなった。担当者は「値上げ理由がしっかり説明できないと消費者に受け入れてもらえない」と話す。

2010年(平成22年) 10月27日 水曜日 読書週間(11月9日まで)

4	政治	89	国際
7	政策	1011	経済
10	11	12	13
14	15	16	17
18	19	20	21
22	23	24	25
26	27	28	29
30	31	32	33

朝日新聞大阪本社 発行所:〒530-8211大阪府北区中之島3-2-4 電話:06-6231-0131 www.asahi.com

